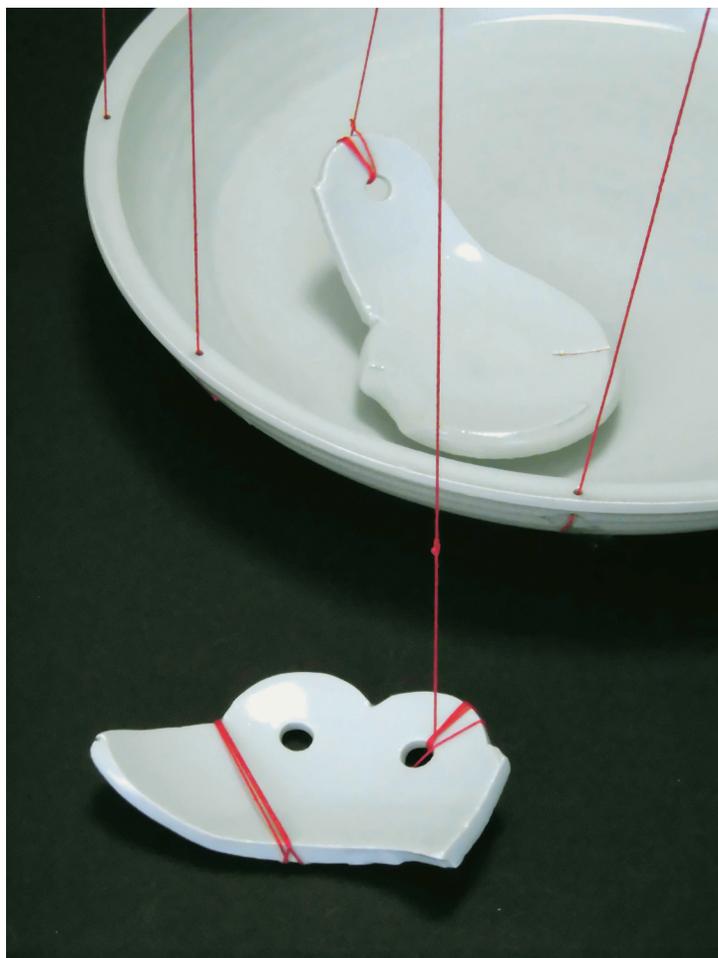


アートギャラリー

白磁

＝アール・ブリュット＝

石田成昭



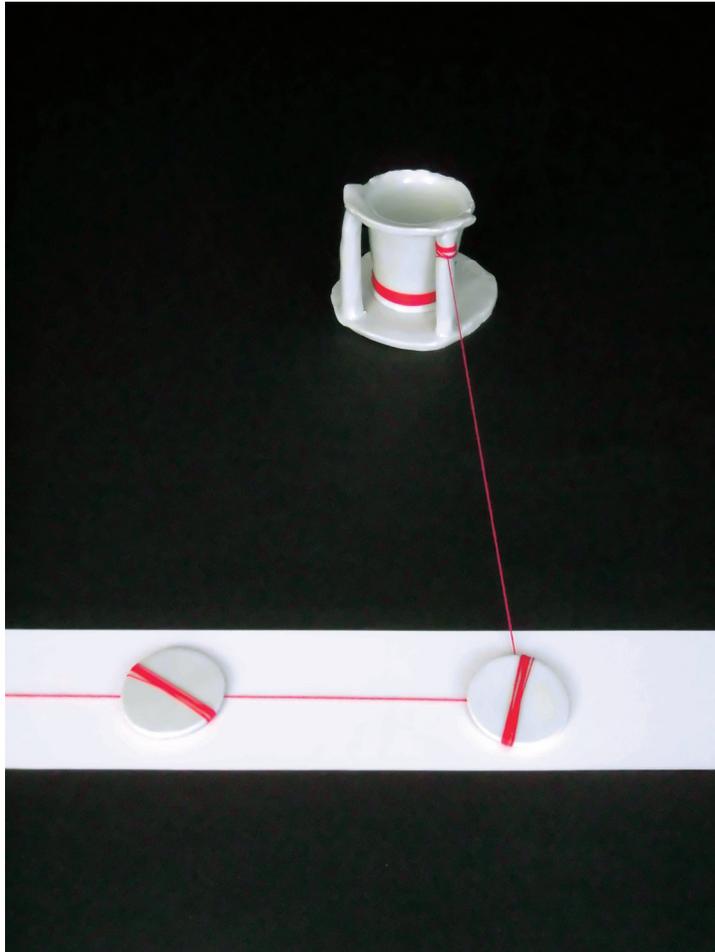
奈野566 高7cm

—アール・ブリュット—

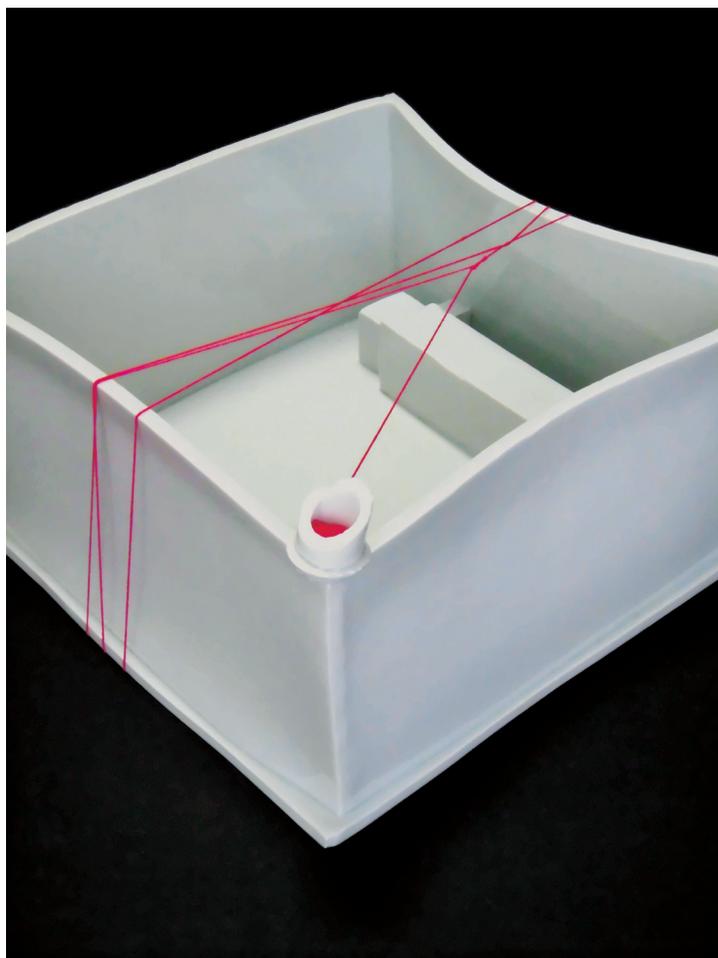
年齢と共に感受性も日毎に鈍くなってきたが、1枚の絵に出会い深く感銘を受け、しばしその場を離れられなかった。その絵は正面を見つめる群像でダンボール箱の裏に色鉛筆で描かれていた。描かれている人達はかつて作者が楽しく過ごした家族なのだろうか。それとも憧れの姿なのだろうか。その絵にはただならぬ靈気が漂い、小さな画面ながらも慈愛に溢れ、ある種の宗教絵画と言った方が良いのかも知れない。一体この絵の出所はいずこにありやと思いを巡らせた。2010年フランス・パリのアル・サンピエール美術館でアール・ブリュット・ジャポネ展が開催され12万人の観客を動員し大きな反響を呼んだと言う。翌々年その凱戦展が大津プリンスホテル淡海であり、その絵と対面した。アール・ブリュットの事は30年以上も前に美術雑誌で見て知ってはいたが、日本人の纏まった作品を見るのは初めてであった。アール・ブリュットとはフランスの画家ジャン・デュビュッフェが定義づけた美の概念で《生の芸術》と訳され、正規の美術教育を受けていない人達の作品をさし、国内では障害者の芸術として語られる事が多い。お金、地位、名声とは全く無縁の人達が直向きに作り出す作品群は圧倒的なエネルギーを放ち、生き物の様に蠢く。人にはモノを造る本能があるが、その本能を顕わにした作品は、美術教育を受けてしまった私の脳味噌を激しく揺さぶり、モノ作りで一番大切な事を包み隠さず教えてくれる。

前述のダンボール箱の絵の作者は小幡正雄（1943～2010）私より2つ年上で同世代と言うことになる。滋賀県の福祉施設では日夜絵を描き続けその膨大な作品の山は窓を塞ぎ室内は薄暗くなったと云う。施設では収納に困り多くが処分されたとも云う。あゝ何と云う勿体ない事を。又彼は赤い服を好んで身に着けたと云う。赤鉛筆を多用したと云うのも何か赤に特別な拘りがあったのだろうか。たぶん赤い色を見ると母親に抱かれている様な安らかな気持ちになれたのだろう。兎に角絵を描く事だけが生きる全てだった事は間違いない。彼の作品は《作り物》の域を脱し《授かり物》へとより聖なる高みへと昇り着いている。

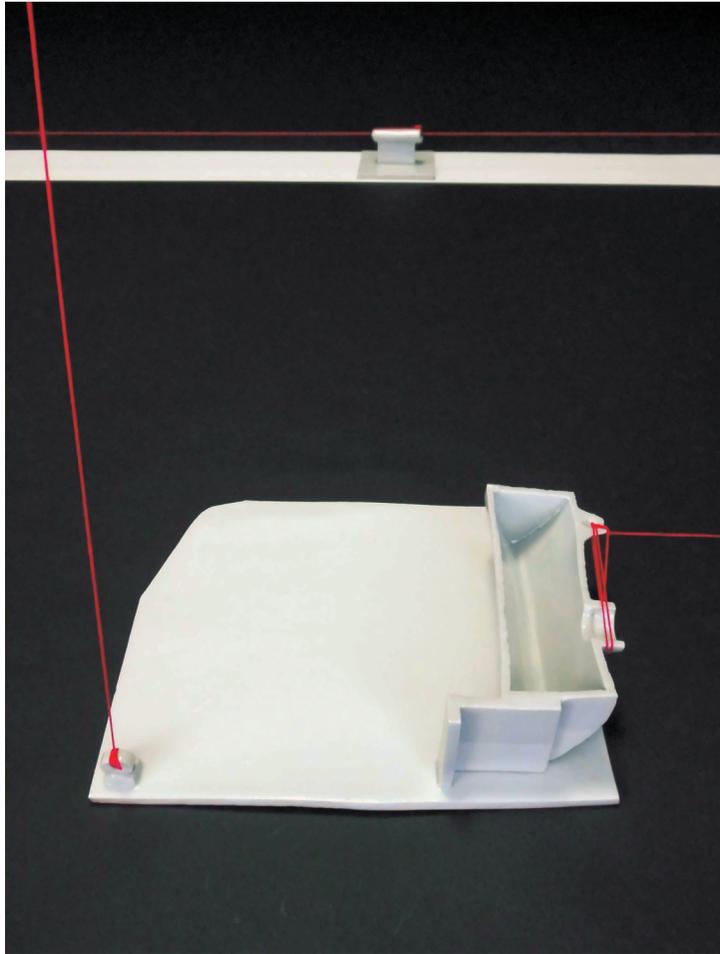
君知るも 嬉し悲しや 身の上の
宿るる天使 とわに尊し



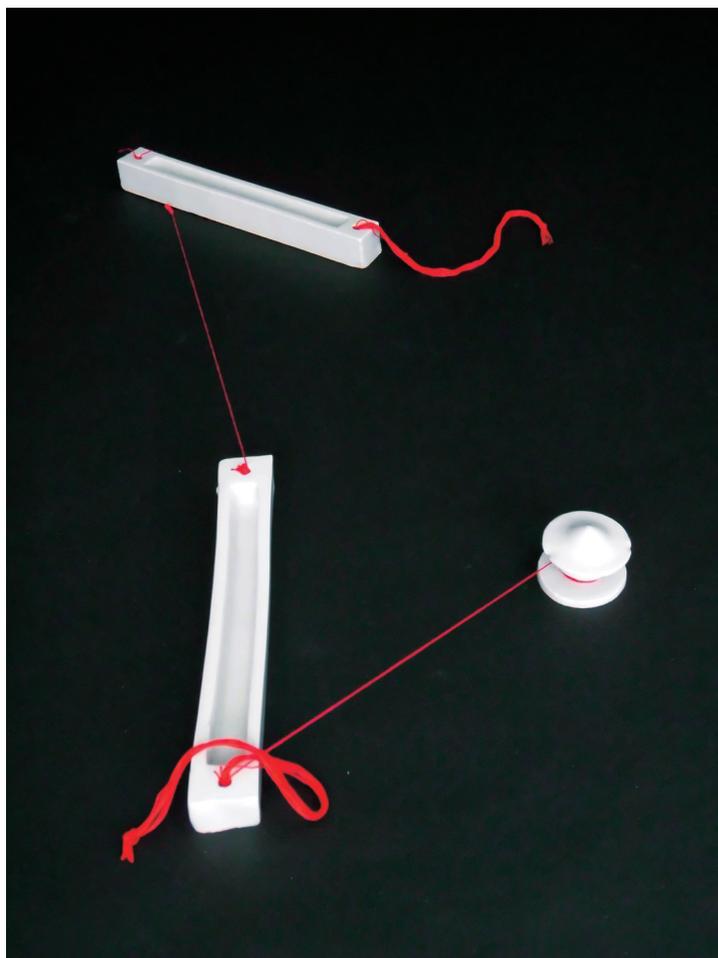
奈野 5 6 3 高 10cm



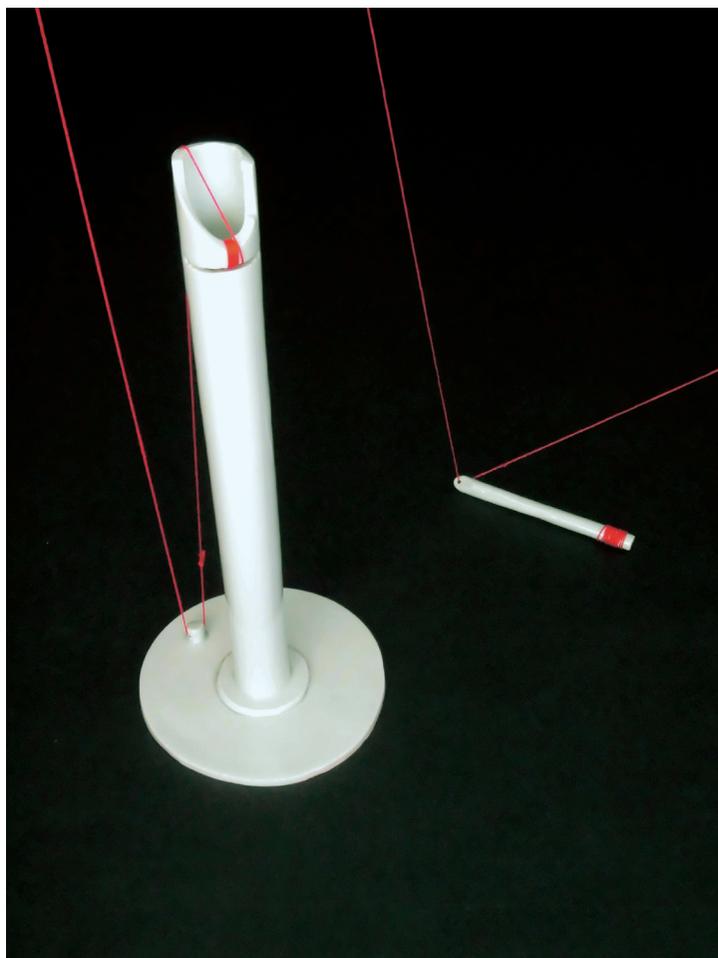
奈野 5 6 7 高 19cm



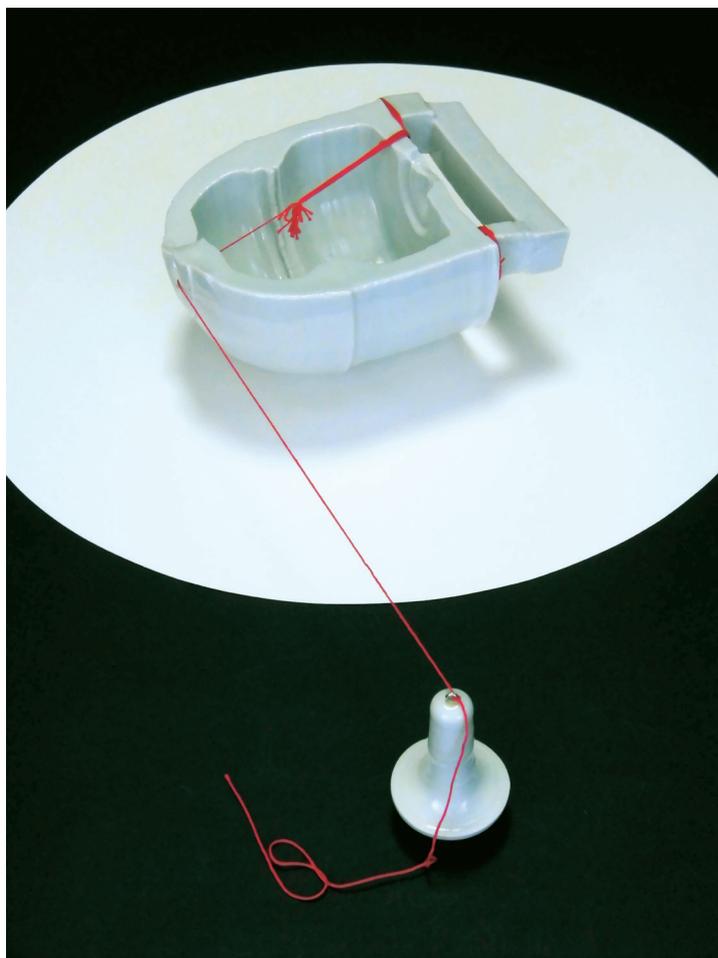
奈野 5 6 4 高 6cm



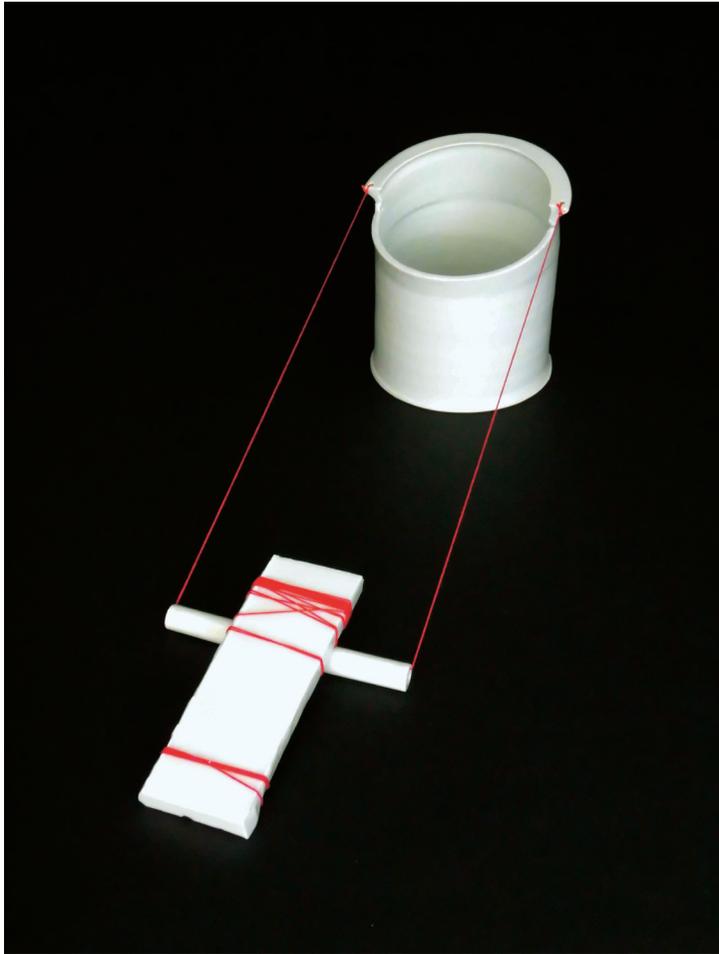
奈野 5 6 5 高 5cm



奈野 5 6 2 高 38cm



奈野 5 6 8 高 10cm



奈野 5 6 0 高 19cm